大乘仏教の歩み——親鸞の眼を通して——

龍樹①　二〇〇八年三月一二日

木越　康

今号から、大谷大学開放セミナー「大乗の歩み」における講義の筆録を掲載します。もともとは、七高僧のそれぞれの仕事と思想について、真宗学科、仏教学科、歴史学科の教員が二回ずつ担当した一般向けの開放講座で、全部で四十二回にわたります。その中から真宗学科教員の講座十四回分を活字化していきます。

編集部

はじめに

これから二回にわたって、インドの龍樹菩薩について、特に親鸞の眼を通してという内容で講義してまいります。親鸞の浄土真宗の思想のなかで、龍樹の仏教思想がどのように影響を与えているのかというところに焦点を絞ってお話をさせていただきます。

大学の連続講座企画ですが、今回私のように親鸞思想を専門とする者が登場するのははじめてのことであります。

そこではじめに、今回の大谷大学の公開講座全体の狙いについて、お話ししておきたいと思います。大きなタイトルは「大乗仏教の歩み―親鸞の眼を通して―」となっております。それから私のテーマが「親鸞と龍樹」です。

「大乗仏教」は、もちろんインドの仏陀からはじまる長い伝統を持ちますが、その歩みが日本の親鸞にまで至り届いた流れを大きく確認していきたいというのが、今回の大学側の企画かと思います。特に視点の中心に置かれますのが「親鸞」という人物ですので、取り上げられるのは「龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空」という七人の仏教者と、そして聖徳太子です。私の担当は、そのはじめの龍樹です。今日はスタートということもありますので、まずは親鸞と七人の高僧の関係からお話しさせていただきたいと思います。その後に、龍樹と親鸞思想について考えていきます。

今日がスタートと申し上げましたが、言わば龍樹シリーズでは前回、前々回と、他の教員がすでに講義を行ったことであります。この連続講義では、一番初めに対象となる人物、本日は龍樹ですけれども、その生涯と仏教思想上の業績に関しての講義がなされます。それは主に史学や仏教学を専門とする教員が担当します。計画では各祖師についてのシリーズがはじまる最初に歴史を専門とする教員が登場し、主にその人物の生涯や基本的な業績について講義します。そして二番目には仏教学を専門とする教員が登場し、対象となる高僧が明らかにした仏教思想とその歴史的な意義について講義します。そして最後に真宗学を専門とする教員が出てまいります。それは冒頭にも触れましたように、先立つ講義を受けて、特に親鸞がその思想をどのように受容し、そこから浄土真宗をどう開いていったのかを確かめようということになるわけです。一応の目論見はそうでありますが、うまくいくかどうかはわかりません。ですから今回の龍樹に関しても、前回前々回と、歴史的立場やインド仏教を専門とする立場から生涯と思想についての講義があったわけです。今回はその内容を継承して、親鸞思想を専門に研究するものの立場から龍樹菩薩の思想について確かめていくことになります。

非常に長いスパンの企画であり、その間多くの先生方が登場することになります。ですから皆さんもそれぞれの講義の主眼に注意しながら、しかしゆったりと学んでいただければと思います。今日は親鸞の視点からははじめてですので、親鸞と七高僧の関係から確認します。一般の方々が多くおられる大学の講座ですので、「聖人」や「さま」というような敬称は、たいへん恐縮ですが基本的には略させていただいて講義を進めていきます。

師資相承

親鸞は、一一七三年のお生まれだとされます。「浄土真宗の開祖」と仰がれますが、親鸞自身は自分をそのように考えてはいませんでした。直接的に浄土真宗を開かれたのは、面授の師である法然だとおっしゃいます。加えて六人の高僧が、特に大切な先輩として登場します。法然を加えて七高僧と通常は呼ばれますが、それぞれ違う国と時代にあって、親鸞を導いた師として仰がれています。インドからは龍樹と天親、中国からは曇鸞、道綽、善導、そして日本では源信と源空です。直接会って指導を受けたのは最後の法然だけですが、親鸞は生涯この七人の高僧方を浄土真宗の祖として仰いでおられます。インドから中国そして日本と、実に多くの高僧方がおられますが、なぜこの七人が特に選ばれてあるのかということは大きな問題ですね。

これは基本的には「師資相承」という言い方をします。法が正しく受け伝えられていく、伝承されていくことを表しています。教えが間違いなく受け伝えられていく、その伝統です。親鸞の場合には、龍樹、天親、曇鸞、そして道綽、善導、源信、源空と相承され、自分のもとまで伝わってきたんだと了解しているわけですね。師資相承について七人が挙げられますが、これが浄土真宗への伝統となります。浄土真宗の思想そのものと言ってもいいのかもしれませんね。しかしここで少し注意したいのが、こういう浄土真宗への教えの伝統を初めに表明したのは、親鸞の師である法然だということがまずはあります。しかもちょっと親鸞とは違う形で表現しています。

資料に挙げておりますのが、法然が書いた『選択本願念仏集』です。この書物の中に、この浄土教、浄土宗の師資相承について、次のような記述があります。

聖道家の血脈のごとく、浄土宗にもまた血脈あり。ただし、浄土の一宗において諸家また不同なり。いわゆる廬山の慧遠法師・慈愍三蔵・道綽・善導等これなり。今はしばらく、道綽・善導の一家によって、師資相承の血脈を論ずるものなり。これにまた両説あり、一には、菩提流支三蔵・慧寵法師・道場法師・曇鸞法師・大海禅師・法上法師。二には、菩提流支三蔵・曇鸞法師・道綽禅師・善導禅師・懐感法師・少康法師なり。

（『真宗聖教全書』一・九三三―四頁）

「聖道家の血脈ごとく、浄土宗にもまた血脈あり」と記されます。「血脈」とは、法脈のことですね。血〈ち〉と書きますが、血筋ということではなく法の伝承ということです。法が正しく伝えられる伝統があるということで、「浄土宗にもまた血脈あり」というのです。そして次に「ただし、浄土の一宗において諸家また不同なり」とあります。浄土宗にまで到る伝統にはさまざまあるのだと言います。

具体的に「廬山の慧遠法師・慈愍三蔵・道綽・善導等これなり」とあります。これは浄土教の伝統について、三つの大きな流れをまず法然は押さえておられるわけです。一つめが慧遠を始まりとする伝統です。二つめが慈愍三蔵を始まりとする伝統です。そして三つめが道綽や善導という方々を始まりとする浄土教思想の伝統です。これら三つの流れを、まず法然は押さえられます。しかし法然の浄土教思想、法然浄土宗は、このうちの一つの伝統に立つものですね。それを次のように表明いたします。「今はしばらく、道綽・善導の一家によって、師資相承の血脈を論ずるものなり」とあります。

法然が継承している浄土教の流れは三つの流れのうちの道綽・善導系を引き継ぐものであるわけです。しかしこの道綽・善導系の流れにもまた、さらに二つの理解があります。一つの流れは「菩提流支三蔵・慧寵法師・道場法師・曇鸞法師・大海禅師・法上法師」であり、今一つは「菩提流支三蔵・曇鸞法師・道綽禅師・善導禅師・懐感法師・少康法師なり」です。ずいぶん多くの人の名前がでてきてたいへんです。しかしいずれにしてもこの二つの浄土教の伝統を、法然は『選択集』に明記されるわけです。

詳細はおそらく法然の講義時に、担当からお話いただけるのではないかと思います。ただここで確認したいのは、法然浄土教の伝承観ということになるでしょうか。法然という方は、仏教史の中でたいへん大きな役割を果たしております。最も大きなお仕事は、「浄土宗」という一宗を仏教諸宗において独立させたことにあるでしょう。「浄土宗」という「宗」を独立して建てたということです。これが後に批判される点でもありますが、そこに法然という人物が果たした仏教史上の大きな仕事があります。

ただその時、いかに智慧第一の法然といえども勝手に浄土宗を建てるわけにはいかないのです。何がしかの大切な仏教的確信を表現する場合、背景となる仏教伝統を示して根拠を見定める必要があります。「わたしには間違いのない伝統、法脈があるんだ」ということを、批判的に検証する態度と共に表現しなくてはならないわけです。そうしないと、自分が教祖になってしまいます。ですから法然は、確かに浄土宗というものを独立させるはたらきをなされるわけですが、だからといってご自身が教祖であるとはおっしゃらないわけです。そんなつもりはさらさらないわけです。ですから独立の際に大切なのは、それと同じほどに「教えには伝承があるんだ」ということを表現することにあるわけです。伝統です。これを『選択集』で確認しようとするのです。法脈や師資相承というのは、ですから親鸞や法然だけではなく、仏教の中では非常に大事な意味を持つものとして理解されるわけです。

そこで法然の言う二つの流れです。二つのうちの後ろの流れだけみます。「菩提流支三蔵・曇鸞・道綽・善導・懐

感・少康」とあります。自分はこの流れの中に立つ者であると、法然は理解しているわけです。お気づきでしょうが、これは親鸞が大切にした伝統と違いますね。親鸞は龍樹を筆頭に七高僧を挙げられますが、法然は六人の名前を挙げられます。菩提流支三蔵、曇鸞、道綽、善導、懐感、少康とありますが、これは今の言い方ですと皆さん中国関係の方になります。

最初の菩提流支三蔵は翻訳家、訳経家ですね。インドの言葉を中国の言葉に翻訳なさる翻訳者です。その他は中国の方ですが、つまりここに数え挙げられる方々は中国仏教に深くかかわる方々です。そこに法然は、日本で起こった浄土宗の伝統の起源をみているわけです。

この法然の相承は、親鸞の七高僧の特異性を反照するものとして大事な意味を持つ伝統の提示だと言えます。親鸞ももちろんこのような法然の伝承の語りをご存じではありますが、それとは異なるインドからの伝統を七高僧という形で強調して表現することになるわけです。私が中心的に確かめる龍樹は、その筆頭に掲げられるわけですね。師法然との違いをあえて強調するならば、親鸞は浄土真宗の伝統をインドに遡って表現しようとされるわけですね。

ちょっと時代が古くなりますが、もう少し「伝統」あるいは「伝承」ということの大切さをみていきましょう。今回の龍樹菩薩以降、皆さんは天親から法然までを順に学ばれますので、仏教における法の伝統ということを確認しておきましょう。仏教ですので、当然はじめに釈尊の言葉があります。仏陀釈尊の最後の言葉とされるものから確かめましょう。山口益先生の編集された『仏教聖典』から抜き出してみます。釈尊はこういう言葉を遺しておられます。

アーナンダよ、汝らは或いはこう思うかもしれない。『師の語は終わった。われわれの教主はもういない』と。アーナンダよ、このことをそのように見るべきではない。アーナンダよ、わたしによって説かれ、知らしめられた法と律とは、わたしの亡きあとはお前たちの師である。（中略）「いざ、比丘たちよ、お前たちに告げよう。

『諸行は壊れる性質のものである。たゆまずに努力せよ』と。」　（山口益編『仏教聖典』・一五二―三頁）

この場面は、まさに仏陀釈尊が入滅されようとするところですね。最後の言葉です。これから入滅し、言わばお亡くなりになっていくのですが、仏弟子アーナンダに対して「『師の語は終わった。われわれの教主はもういない』と見るべきではない」とおっしゃいます。ご自身の入滅、人間釈尊の生命の終わりの場面です。そして次のようにおっしゃいました。「アーナンダよ、わたしによって説かれ、知らしめられた法と律とは、わたしの亡きあとはお前たちの師である。（中略）いざ、比丘たちよ、お前たちに告げよう。『諸行は壊れる性質のものである。たゆまずに努力せよ』」と、こう言い遺して釈尊は入滅なさいます。「説かれ、知らしめられた法と律とは、わたしの亡きあとはお前たちの師である」ですね。

ですからその後の仏弟子たちは、釈尊が説かれた「法と律」、つまりは教えと戒めを自分たちの師として大切に伝承し、聞き留めていこうとされるわけですね。スートラです。これを師として大切に仰ぐようになるわけです。釈尊個人ではなく、釈尊が説かれた教えと戒律を大事な指針として、永く保とうとするわけです。ですから、仏弟子たちにとって何より大切なことは、伝承されてきた教えです。それを間違いなく、次の世代へ次の世代へと受け継いで、いわば相承していって、自分もその中に身を置こうとするわけです。そういう歴史の中で教えを受け止め、論じ解することが行われていきます。伝承された先達を敬いつつ、その内容について論じ釈する。そうやって仏陀の「教え」から「論」や「釈」というものが出来上がっていくわけですね。仏教の伝統です。これが大切に守られて未来に等流していくわけですね。

親鸞も七高僧の中の一人に挙げられる道綽禅師は、これについて次のようにおっしゃいます。『安楽集』の言葉です。親鸞は『教行信証』の末尾に、大切な意味を持つ教えとして引用なさっています。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり、と。

（『真宗聖典』・四〇一頁）

先の時代に生まれた者には、後の者を導く責任がある。これはもちろん仏教の伝統のことを言っているのですね。仏道の歩みの伝統をおっしゃっていて、自分がいただいてきた法と律というものによって後の者を導こうという意味ですね。勝手に自らの思いで導くのではなく、師資相承を大切にします。そして「後に生まれん者は前を訪え」ですね。前に伝えられてきた教え、自身に先立って学ばれた方々によって大事に保たれてきた法、教えというものを敬って訪ねなさいということですね。このことが「連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す」ですから、法の相続、教えの伝承が止まらないようにということが強く願われるのですね。なぜこのことが強く願われるのか。その理由が「無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり」とあります。数限りない、あるいは止まることを知らない人間の迷いの姿、広くて深い混迷の世界を救い尽くそうとされる志願ですね。それらを救い尽くさんがために、願わくは法の流れというものを途絶えないようにしたい、あるいはさせたい、これが道綽禅師の『安楽集』に語られ、親鸞も『教行信証』の最後に同じ意思を受け記される内容になるわけですね。ですからこれは『安楽集』の言葉であり、また親鸞が大事にした言葉ですけども、そもそもが釈尊に遡って大切にされた仏教的精神そのものになるわけでしょう。教えの伝承への願いは、救済の伝統への願いであり、大乗仏教の精神そのものになるとも言えるでしょうね。

そういう中で親鸞は七高僧を、浄土真宗の大切な法脈として掲げられ、法然は六人の方々を浄土宗の伝統の大事な先達として挙げられるわけです。法然の場合はこの中から菩提流支三蔵を抜いた五人を「浄土五祖」と仰ぎます。特に法然が独自に示された浄土宗の歴史は、曇鸞を起源とする五祖になるわけでしょう。法然の思索を遺したものに『黒谷上人語灯録』というものがございます。法然の語録ですね。そこに「浄土五祖伝」というものも作られていま

す。これは法然が浄土教の相承として仰ぐ五人の伝記を集めて編纂されたものです。曇鸞に関しては六つの伝記、道綽からは四つの伝記、善導は六つの伝記、懐感からは二つの伝記、そして少康と、まあいろんな所に、皆さん高僧方ですから伝記が残っているわけです。それを法然は集めて「浄土五祖伝」として示されるわけですね。法然の場合なぜこのような記述にこだわったのかと言いますと、やはり弾圧があったからでしょう。法然の浄土宗、念仏を柱とする浄土教思想はご承知のように厳しい批判を仰ぐことになります。その批判の論点の一つが、「お前は勝手に浄土宗を建てたではないか」というものですね。仏教の伝統に則って教えをいただくのではなく、自分勝手に教えを建立したと批判されるわけです。そこで法然は、「そうではない」ということをきちんと語らなくてはならなくなるわけです。仏教の伝統の上に自身がいただいた教えがあるのだということを明確にしていかなくてはならないわけです。そこで五祖の伝記をまとめられるわけですね。

そのような法然上人のご苦労をよくよく知っている親鸞は、ところが龍樹―天親―曇鸞というように、「浄土五祖」から「浄土七祖」になるわけです。この違いがどういうことかと言いますと、つまり法然は浄土教の伝統というものを中国からのものとして表明されているわけです。中国から日本へと伝えられてきたものがわが浄土宗であるということですね。ところが親鸞は、インドから浄土真宗の伝統をみようとするわけです。はじめの龍樹と天親はインドの方々ですね。法然の相承ですと言い方は悪いですけども、これでは浄土宗の伝統がインドにまで遡ることが明示できないわけですね。訳経家がそのスタートに置かれはしますが、インドそのものの仏教思想には遡らない形で伝承のはじまりが確かめられているわけです。しかし親鸞はインドの、それも八宗の祖とも仰がれる龍樹にまで遡って浄土宗の伝統を確かめようとされるわけです。ここに親鸞が法然の教えを受けながらも、七祖を挙げようとされた大切な意味をみるべきでしょうか。法然から伝統された浄土教思想を「浄土真宗」として受け止め、その背景をインドにまで遡ろうとされる。

なぜインドに遡らなければならないのかというと、すこし雑な言い方をしますと、そうでないと「浄土教思想は中国から始まったんだ」ということになってしまうわけです。中国でもいいと言えばいいのでしょうが、これですと先ほど申し上げました師資相承が、釈尊の教えにつながらないことになりますね。どこから始まって自分の所にまで至り届いたかというと、曇鸞起源になるわけでしょう。浄土教思想は中国で生まれた思想だということにもなるわけです。ですから親鸞が七祖を挙げることは、そうではないのだということを表明する意味をもつことになるわけですね。浄土真宗の起源はインドにあるのだということです。浄土真宗はインドの地で芽生えたのだという意味を持つわけです。これが親鸞の「七高僧」の大事な視点ですね。

しかしもちろんこれも、親鸞が勝手に龍樹を伝統のはじめにくっつけたということではありません。法然の五祖の頭に、勝手に龍樹を付け足すわけではありません。法然が中国の曇鸞を第一祖として仰いだことを確かめましたが、実はその曇鸞の著作『浄土論註』をみますと、そこに龍樹の伝統を示唆する言葉がでてくるわけです。龍樹からの伝統が指南されています。

> 謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに、云わく、菩薩、阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。難行道は、いわく五濁の世、無仏の時において、阿毘跋致を求むるを難とす。…中略…「易行道」は、いわく、ただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願ず。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得しむ。仏力住持して、すなわち大乗正定の聚に入る。
>
> （『真宗聖典』・一六七―八頁）

曇鸞の『浄土論註』冒頭に、龍樹菩薩が登場しています。これから『無量寿経』に説かれる浄土の教えについて論じようとする曇鸞が、第一に名前を挙げて仰ぐのがインドの龍樹なのですね。ですから法然上人は祖師のはじまりを曇

鸞に置きますけれども、その曇鸞は自らの思索のはじまりを龍樹に置いておられるわけです。ですから先ほど親鸞が法然とは違って浄土教思想の大切な伝統のはじまりをインドにもっていったということを強調しましたが、実は曇鸞が自ら浄土教に帰依していく根拠を龍樹菩薩の教えに見出すわけです。そういう意味から言うと、浄土教思想による救済の起点を曇鸞にすることと龍樹とすることとは、実は同じなんですね。はじまりとして曇鸞をみれば、その曇鸞自身が教えのはじまりを龍樹に置いているわけです。これを親鸞は大事にされて、恐らく一般の仏教史から見ていくと浄土教のはじまりは曇鸞になるのかもしれませんが、親鸞の眼差しからするならばインドの龍樹を第一祖と仰ぎ、実は浄土真宗の教えがインドから相承された真実の教えなのだということを確かめることになるのです。

親鸞「正信念仏偈」と龍樹菩薩

さてその上でここからようやく龍樹菩薩の浄土教への拓けということを確かめていきましょう。まずは人物を確かめましょう。これも真宗学を専門とする立場からの視点で紹介させていただくことになります。親鸞がどのようにみていたのかということです。その際最も目安となるものは親鸞が作られた「正信念仏偈」や「高僧和讃」になるでしょう。これは龍樹だけではなく、これから親鸞の視点から七人の高僧方を確かめていく時の共通の目安になるものだと思います。これから各講義で先生方がそれぞれに引用して紹介されると思います。今日の資料に用意しているのは、「正信念仏偈」です。親鸞作です。主著『教行信証』の「行巻」の末尾に付されたものですが、親鸞の自筆も遺されています。実際に書かれたものですね。龍樹について語られる個所を読んでみましょう。

釈迦如来楞伽山　為衆告命南天竺
龍樹大士出於世　悉能摧破有無見

宣説大乗無上法　証歓喜地生安楽
顕示難行陸路苦　信楽易行水道楽
憶念弥陀仏本願　自然即時入必定
唯能常称如来号　応報大悲弘誓恩

（『真宗聖典』・二〇五頁）

「正信偈」は漢文によって作られた詩ですが、これを書き下しにしてみます。次のようになります。

釈迦如来、楞伽山にして、衆のために告命したまわく、
南天竺に、龍樹大士世に出でて、ことごとく、よく有無の見を摧破せん。
大乗無上の法を宣説し、歓喜地を証して、安楽に生ぜん、と。
難行の陸路、苦しきことを顕示して、易行の水道、楽しきことを信楽せしむ。
弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る。
ただよく、常に如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし、といえり。

「釈迦如来、楞伽山にして、衆のために告命したまわく」という言葉でもってはじまります。ここからが龍樹についての段になります。釈迦如来が「衆のために告命したまわく」ですから、「お釈迦さまは楞伽山において、人びとに次のように告げられました」ということになりますでしょう。何と釈尊は告げられたのかというと、それが次にあります。「南天竺に、龍樹大士世に出でて、ことごとく、よく有無の見を摧破せん」です。そして「大乗無上の法を宣説し、歓喜地を証して、安楽に生ぜん」と続きます。こういう風に親鸞は龍樹菩薩のことを「正信偈」の中で記述

しておられるわけです。

これらの内容は『楞伽経』という経典に説かれているものです。「正信偈」は親鸞が作ったものですが、もちろん勝手に伝記や思想を描いているわけではなく、さまざまな経や論や釈あるいは高僧伝などを参照して釈尊の教えや七祖の生涯と思想を描いていかれます。ここの龍樹の内容は『楞伽経』です。その部分の記述をちょっとみてみましょう。

南国のヴェーダーリーに、栄光あり、名声大いなる比丘が出現する。彼は、名をナーガといい、有と無の主張を打ち砕く。わが乗である無上の大乗を世間に明らかにして彼は、歓喜地を得て、スカーヴァティー（極楽）に行くであろう。

（『入楞伽経』）

こういう『楞伽経』をもとにして、親鸞は「正信偈」を作っていかれるわけです。『楞伽経』はもちろん経典ですが、龍樹が活躍なさる前に説かれたお経ということになっています。釈尊が龍樹が誕生するであろうことを予言しているという、不思議な内容になっています。もちろん出来上がったのは龍樹が活躍した後と考えられますので、逆にいうと龍樹を讃仰することが目的となっている経典ということになりますね。何も釈尊には不思議な予言力が備わっていたのだということを言いたいのではなく、龍樹を讃嘆することに大きな意味を持つ経典です。「世尊はかつて楞伽山において教えを説かれた時、集まられた大衆に向けて次のように告げられました。後の世の南インドに龍樹と名のる菩薩が出生され、ことごとく有無の邪見を破るでしょう。この上なき大乗の法を説き広めて自ら歓喜地の位に至り、ついには安楽国に生まれるでしょう」と、こういう風に釈尊は予言したということになるわけです。

これは、どれほど龍樹という人物が仏教史において大きな役割を果たしたのかということを象徴するものではあり

ますが、今はこのことについて詳しく申し上げることはしません。思想的な側面というか、「正信偈」が注目する視点に注目しましょう。「ことごとく有無の見を破る」という龍樹の仕事の確かめです。これが龍樹の果たされた大切な仕事の内容だと、親鸞は言われるわけです。

この「悉能摧破有無見」の詳細については、おそらく仏教学の専門の立場からの講義は終わっていると思います。龍樹が仏教思想史上に成した大きな役割です。「有無の見を破す」という龍樹の偉大な仕事です。

龍樹は南インドの方です。釈尊が活躍なさったのはインドの北方ですが、龍樹は南インドです。今は仏跡の一つともなっていますが、アマラヴァティやナーガールジュナコンダと呼ばれる場所が、龍樹が活躍された所だとされます。古い遺跡が今も残っています。南インドで龍樹という方が生まれ、そして活躍なさったということなんですけども、アマラヴァティには古い僧院跡があります。仏教研究が盛んな所であったようです。またナーガールジュナコンダは、もともとの場所は現在はダム湖の底に沈んでしまっているのですが、今は下にあった遺跡を上方の島に移してあります。それで現在はダム湖をボートに乗って参拝することになります。

一昨年にこれら南インドの龍樹にまつわる地に、学生たちと研修に訪れました。そこには博物館があって、研究員に質問するといろいろと教えてくださいました。私からすればちょっと面白いことを二つ教えてくださいました。真実かどうかはわかりませんが、興味深い話でした。

一つは、ナーガールジュナコンダから発見された龍樹の石像、当然かなり古いものです。それが後々の多くの釈尊像の原型になったのだと、その研究員はおっしゃっていました。仏陀釈尊の姿を表現したいわゆる仏像や絵像などは、もともとは無かったものですね。先にも確かめましたように釈尊は、自分ではなく法と律とがお前たちの師であると告げて入滅なさいました。ですから残された弟子たちは、釈尊個人を仰ぐ意味を持ってしまう仏像などは造らずにいたのだとされています。法を仰ぐのだという教えを大切にして、仏像を造らなかったわけです。その代わりに仏陀を

表現するものとして、法輪をその印として石に刻んだり、菩提樹を描いたりされたのですね。法輪や釈尊がその下でさとりを開いたとされる菩提樹、これらを描くことによって、仏陀釈尊を象徴的に表現したわけです。ところが後に釈尊像というものが誕生してくるわけですが、その時の原型となったのが龍樹菩薩像なのだということを、そこの研究員の方がおっしゃっていました。

それともう一つ教えてくださいました。これについては実は、この講義の事前打ち合わせの際に、ご担当くださったインド専門の先生方に伝えたら、「そんなバカなことはないだろう」と叱られた内容になります。ですから本当は言わない方が良いんでしょうけども、インドでは「なるほど」と思う面もありましたので皆さんにはお伝えしておきます。龍樹菩薩には、たくさんの著述が残されています。膨大なものです。とても学びきることが出来ないほどのものですね。そのことについて質問した時、インドの研究員の方は「実は龍樹は一人ではなかったのです」とおっしゃいました。「たくさんの方々が龍樹のもとにいた、あるいはグループをなしていて、その総体が『龍樹』なのだ」と言われたのです。通常は龍樹はお一人おられて、その龍樹がいろんなかたちで思索を表現なさったと理解されます。しかしそのインドの研究員は「龍樹というのは実はグループを指すんだ」という風なことをおっしゃったわけです。日本のインド仏教専門の先生方からは叱られましたので、もう言うのはやめますが、そのインドの方の説明を聞いて「なるほど」とも思ったことであります。

難行と易行を顕示する

ともかくそのような龍樹菩薩のお仕事を、親鸞聖人は「正信偈」で「有無の見を破したことにある」と書き記すのですね。「有」とは、有るですね。「無」とは、無いということです。つまり人間は分別によって、これが有るとかこれが無いとか、これは良いとか悪いとか、分別しますね。有れば嬉しいし、無ければ悲しい。あるいは逆に、有れば

悔しいし、無ければ嬉しいということもあるでしょう。これらはしかし、すべては人間もしくは自分の都合によって世界の事象を捉えて表現しているだけなのだということになります。自己中心的な物の見方と判断に基づいた分別の事柄になりますね。有る無しに一喜一憂するのが私たち人間です。財があれば嬉しいし、無ければ悲しい。富や名声が有れば嬉しいし、無ければなんとなく寂しいという感情が起こることもあるわけです。しかしまた、富や名声が有ったなら有ったで、それを失うことに不安や憂いや怒りを感じることになるでしょう。それが人間です。ですから人間というのは、私という存在を中心に、物事の有・無を分別し、それに振り回され惑わされて生きていくことになるわけです。そのような有・無の見識が、人間の愚かしい分別から起こってくる虚仮の思索であるということを龍樹は明らかにしてくださったわけです。それが龍樹という人物が仏教史上において果たした大きな役割であるわけです。無分別の世界、空の世界を教えてくださるのです。あるいは、「そのようなことをお示しくださったのが釈尊なのだ」ということを明らかに説き示してくださったのが龍樹ですね。それが龍樹大士が南インドにあって「摧破有無見」というお仕事を果たされたということの意味になります。

そのような役割を仏教史上において果たしたのが龍樹ですが、親鸞の眼からすると龍樹はそれに加えて、さらに別の視点を広く説き示された方になるわけです。これが曇鸞が『浄土論註』で明らかに示された龍樹でもあるわけです。浄土真宗の祖師としての龍樹ですが、「正信偈」の続きは、そのような龍樹を紹介することになります。親鸞は次のように記していますね。「顕示難行陸路苦　信楽易行水道楽」とあります。「難行の陸路、苦しきことを顕示して、易行の水道、楽しきことを信楽せしむ」となります。これに続く句も読んでおきましょう。「憶念弥陀仏本願　自然即時入必定」です。「弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る。ただよく、常に如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし、といえり」とあります。

こういう風に、親鸞という方は龍樹のお仕事を了解なさいます。一応、簡単に訳をしてみましょう。「龍樹菩薩は、

陸路を歩むような仏道修行が苦しい難行であることをお示しになり、水道を進むが如き易行の道の楽しいことを信知させようとされたのです」ですね。龍樹は、陸路を歩んで進むような仏道修行がたいへん苦しい困難な実践であることを説き示し、水道を進むが如き易行道の楽しいことを広く説き示されたのだということを親鸞は特に取り上げます。これが龍樹の仕事だということを強調して語ります。そして次に、「衆生は阿弥陀如来の本願を心に憶い念ずるならば、ことさらに計らわずとも、即時に必ず涅槃にいたるべき身と定まるでしょう。ただ南無阿弥陀仏と称えて、阿弥陀の大悲本願のご恩に報いるべきでありましょう」です。こう教えたのが龍樹であるという視点を親鸞は提示します。

この二句目や三句目にある「阿弥陀如来の本願」や「称名」は、次回尋ねます。今日は「難行の陸路」と「易行の水道」について続けて講義しましょう。

まず注目したいのが「難行」と「易行」という言葉です。龍樹菩薩がこのような二つの「行」を明らかに示されたと言います。このように龍樹を理解することも、もちろん親鸞には背景と根拠があります。勝手に龍樹について主張しているわけではありません。思想史的根拠があって、この句を作っておられるわけです。その背景になるのが、龍樹の著書であると伝えられる『十住毘婆沙論』という論書です。そこには次のようにあります。

仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもって疾く阿惟越致に至る者あり。乃至　もし人疾く不退転地に致らんと欲わば、恭敬心をもって執持して名を称すべし。もし菩薩この身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲わば、当にこの十方諸仏を念ずべし。

（『真宗聖典』・一六五頁）

この『十住毘婆沙論』に親鸞は注目し、あるいは先ほど確認したようにまずは曇鸞が注目しているのです。曇鸞の言葉で言いますと「謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに…二種の道あり」です。よくよく龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』の教えを伺ってみると、そこに二つの道が示されているということですね。二つの道は「勤行精進」の道と「信方便の易行」です。この二つの道が説かれているんだ、と。

この二つの道は難行易行とあるように、「行」の問題と理解して考えればいいかと思います。仏道修行上の実践の問題です。真理の世界に到達するための「道」の問題だと言ってもいいでしょう。

そこでその道について龍樹は、「陸路」と「水道」の二つの道があるんだと教えるわけです。陸路ですから、歩いてその真理に到達するのが一つの道、今一つが、川に浮かぶ船に乗って進むという道ですね。皆さんはどうでしょうか。長い旅路を進むのに、どちらを選ばれますか。なんだか船に乗って進みたい気もするし、船に乗るのはちょっとずるいような気もするし、というところで思案なさいますでしょうか。ともかく、『十住毘婆沙論』にはそのように仏道について説かれるわけです。

龍樹という方は、一般的に龍樹菩薩と捉えと、やはり難行道を大事にされる姿が浮かぶはずです。「菩薩」ですから、悟りに向けて努力を惜しまない方として長く尊敬されています。難行道をキチッと歩みなさいということを説いた方が龍樹だと理解されるでしょう。仏陀が説かれた戒律を守って、智慧を深めて修行しましょうということですね。それによって少しずつ少しずつ、一歩一歩、覚りの世界、阿耨多羅三藐三菩提に近づいていきましょうということになるわけです。それを説くのが龍樹菩薩であると理解されますね。

菩薩の実践

菩薩道の実践は、伝統的に「六波羅蜜行」というようなものとして整理して伝えられます。「波羅蜜」というのは、

「最高の状態」という意味です。それに「六」が付くわけですから、「六つの最高の状態」となります。通常仏教の道を進むには、この六波羅蜜の行を実践しなくてはいけないわけです。目的は何かというと、もちろん仏陀と同じ境地に到達するためです。今日の話からすれば、有無の見というものを突破する境地に至るために、この六つの最高の状態を保たなくてはならないわけです。もちろん龍樹が菩薩行を説くときにも、この六波羅蜜を背景に持っています。六つとは、一つが布施の実践、一つが持戒の実践、その後は忍辱、精進、禅定、智慧になりますね。布施というのは「他者に与えること」ですが、さまざまな内容があります。財施・法施・無畏施などです。特に無畏施とは、「無畏」というのは畏れの無い状態という意味ですから、畏れの無い状態を相手に布施するということになります。相手の畏れを取り除いて差し上げるという実践になりますね。これらの布施行を完成させることにおいて最高の状態を保持し続けることが、悟りへの道の一つとなるのです。持戒は、戒律を守ることの完成ですね。先ほど言いましたように、法と律を釈尊は説いたんですけども、戒めをしっかり守っていくことが二番目になります。そして忍辱ですね。苦難に堪え忍ぶ行為を完成させることです。そして精進は、真実の道を求める努力を完成させることですね。禅定は、精神を統一する集中力を完成させること。そして最後が智慧ですけれども、空を観察する智慧の完成です。真実の智慧の獲得において最高の状態を保持することですね。このように難行というものは、伝統的な菩薩道ということを背後において、例えばこの六波羅蜜の行を修める道を指し示すことになるのです。

この六波羅蜜は「行」ですが、それともう一つ難行道で基本的に大切にされることがあります。「行」に対しては「心」ということになります。「行」と不離のものとして龍樹は大切になさいます。特にこの「心」の面では、「利他」が強調的に語られることになります。仏教の言葉で「自利」とは、自分が覚りの世界に近づくための行ということになります。「利他」とは、他者を導く行為です。他を利益することです。龍樹が大事にされる菩薩道は大乗の仏道ですから、自分だけが救われるのではなくて、他者と共に救われていく仏道を求めたわけです。それが龍樹です。

私が仏道に救われ、他が救われる。むしろ他が救われることによって自己が仏教に救われるということになるのでしょうが、このような大乗の仏道が語られるとき、六波羅蜜行とあわせて「心」の問題も重視されるのです。どんな「心」が要求されるかと言えば、そこで「四無量心」というものが説かれます。四つの無量の心です。六つの最高の状態と四つの無量の心を保持することが大切な実践として理解されることになるのです。

四つは、「慈・悲・喜・捨」ですね。「慈」は、生きるものに楽を与えようとする心のはたらきです。「悲」というのは悲しみという字ですけども、生きとし生けるものの苦を抜き取ってやろうという心のはたらきですね。三つ目の「喜」は、他者の喜びを妬まずに自己の喜びとする心のことです。これは結構難しい心持ちになりますね。他者の喜びを妬まずに、我が事のように喜べますでしょうか。これはとても難しいことですね。我が子の喜ぶ姿はまさに我が事のように喜べますけど、敵対するもの、ライバル視するものの喜びの姿は、腹立ちや妬みの心の引き金にもなってしまいますね。ですから四無量心で説かれる「喜」というたった一つの心持ちも、維持することはとても難しいことになるわけです。また大切な内容のお心として、最後の「捨」ということがあります。相手を好きだとか嫌だとかという分別によって差別しないことが大切だと示されます。分別を捨てる。好き嫌いによって他者を差別し、見捨てないという心にも理解されます。これが四無量心です。

この六波羅蜜と四無量心が両輪のように合わさって、象徴的には智慧と慈悲という言い方をしますけれども、自分の智慧を磨き、そして慈悲の心を養い、自利利他円満の道を歩んでいくのです。これが大乗の菩薩道の基本ですね。これが大事な道だと語ったのが、龍樹菩薩でもあるわけです。龍樹の『菩提資糧論』に説かれるようにまさに覚りの資糧ですが、それによって釈尊の境地に近づこうとするのです。

これが難行ですが、もう少し考えてみましょう。と言うのは、仏教の教えは常に自分の身に引き当てて考えなくてはいけないということがあります。そのことによって、説かれることの意味が少しは身体から聞こえてくるようにな

ります。単純に言うと、これらの行や心が自分の身の上に成立するかどうかを、少しお考えいただければと思います。時間もありませんので、今日は戒律だけ取り上げましょう。身に引き当てて確かめてみましょう。戒律を守ることを完成させるというのは一体どういうことか、ですね。

最も初歩的なものとして示される戒に、「五戒」があります。五つの戒です。当然これは、欲望の放棄のための戒めです。同時に真理に到達するための戒めです。五つとは「他者を殺すことをやめる」、「他のものを盗むことをやめる」、「邪な交わりを持つことをやめる」、「うそをつくことをやめる」、「我を忘れ酔うことをやめる」です。不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒と言います。これは先ほど言いました、六波羅蜜行の中の二つ目にある「持戒」の内容になります。布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の二番目です。他者を殺さない、他者に帰属するものを盗まない、他者と邪な交わりを持たない、他者にうそをつかない、我を忘れ酔うことしない、という生き方になります。

この五つの戒めですが、皆さんはどうでしょうか。仏道、菩薩の道を歩む時にこの五つの戒律が最低限守られるべき事柄として示されるわけですが、皆さんは保持することが可能でしょうか。これが、仏教の教えを身体を通して聞くということにもなります。仏の教えを聞くのは、耳だけではなく、身体で聞くことが大切です。この戒については、どうでしょうか。我が身の中で成立するかしないか、です。仏教が法を理解すればいいだけということであるならば、言い方は悪いかもしれませんが、それほど難行だということにはならないでしょう。勉強すれば、多少の努力は必要ですが、説かれる法の内容は理解できると思います。一生懸命聞き、何度も確かめて勉強すれば理解できます。しかし仏教で一番大切なことは、頭ではなく、そのような真理に到達する道を自身が進んでいけるかということになるわけです。一つ一つ身が近づいていくことが可能かということです。

ここに示された五つの戒めごとを、皆さんも身体を通して聞き止め、守っていく自分が想像されるかどうかということです。最初の不殺生、「他者を殺すことなかれ」は可能かもしれませんね。「他者」を「あらゆる生き物」と考え

れば、ちょっと難しいですかね。しかしひょっとすると、なんとか可能かもしれないと頷いている人もいるかもしれません。そうすれば、戒律の一つをクリアしたことになります。一歩覚りに近づきます。次をみてみましょう。他のものを盗まないです。ここでもう無理でしょうか。可能でしょうか。これもなんとか可能なのかもしれませんね。「盗み」を働かないということです。では一応クリアしたということにしておいて、次にいきます。「他者と邪な交わりを持たない」ということです。これは在家であるか出家であるかによって、内容の厳しさが分かれます。在家仏教者に対しては、まあ「浮気をしない」などということも入るでしょうか。これは自信がありますかね。四つ目が「不妄語」ですね。「うそをつかない」ですね。もう少し言えば、悪口や二枚舌も「妄語」に入ります。どうでしょうか。そして最後が「不飲酒」です。酒などを飲んで、我を忘れない。

まあこのような内容が最も基本的な戒律ですが、難行と言ってもこのように一つひとつを確かめてみれば、まったく無理ということでもなさそうですね。少しづつ、実践を延ばしていけばいいんです。すべて一度に、一生涯と考えると難しいですが、ひとつひとつ、一秒一秒を重ねていけば、長い間戒律を保つことも出来るように思えます。不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒の戒めを十秒なら守れるでしょう。いや十分ぐらいはいけるんではないでしょうか。十分できるのなら、一時間ぐらいは可能でしょう。一時間が可能であれば、一〇時間に延ばしてみましょう。これができれば二十四時間に延ばし、三日に延ばし、一週間に、一月に、一年にと延ばしてみましょうか。さあ皆さんの身体に聞いてみてください。どれほど保持できるでしょうか。三日間ぐらい、入院した気になって静かに黙って過ごせば、可能になるでしょう。

ところが仏教の戒律には面倒なことがもう一つあって、この殺生や邪淫などの悪は十悪という形でもう少し展開し、戒められるようになります。五戒が基本ですが、十の悪を慎む行為、十善業ということが言われるようになります。十の悪を為さないようにするのが十の善行ですね。基本的に五戒に同じです。特に最初は一緒で、殺生をしない、偸

盗をしない、邪淫をしないです。次の「妄語」が少し展開します。「綺語」や「悪口」や「両舌」も戒められます。大口をたたかないことや飾り言葉を言わないことですね。そして悪口を言い、二枚舌を使わないことです。ちょっと整理してみます。

十悪

殺生・偸盗・邪淫（身三）

妄語・綺語・悪口・両舌（口四）

貪欲・瞋恚・邪見（意三）

十善

不殺生・不偸盗・不邪淫

不妄語・不綺語・不悪口・不両舌

不貪欲・不瞋恚・不邪見

初めの三つ、殺生・偸盗・邪淫は身の行為なので「身業」の悪と理解されます。身の行為として殺さない、盗まない、邪な交わりをしないという戒めです。次の妄語・綺語・悪口・両舌は口の行為なので「口業」です。そして三列目です。これが非常に厄介になります。「貪欲・瞋恚・邪見」というのは、これは心のはたらきです。「意業」と言います。「意」は、意識や意欲の「意」ですが、つまりは心の問題ですね。したがって十の善は、心の戒めにも関わるわけです。貪欲な心を持たない。瞋恚は怒りですから、心に怒りを持たないということです。邪見は、邪な捉え方をしない

という意味になりますね。偏った邪な見解、物事を本当にその物事としてみることができない心のありようを戒めるということです。

このように「十」と数えても内容は「身・口・意」という三つを母体とするものとしてあるのですね。しかし三つの母体と言っても実は、それぞれの行為はすべて一番底にある「意（こころ）」を根本として起こるものだとわかりますね。なぜ「殺生」が身に行われるのか。それは心に怒りを懐くからでしょう。なぜ口に悪口が行われるのか。それは同じく心に悪意を持つからでしょう。なぜ二枚舌のような両舌の発言が行われるのか。それは心の底に隠れる「貪欲」が、自分の利益を求めて発言させるのでしょう。表に現れる行為のすべては、すべて底にある「意」から起こるんですね。意識無意識を含め、意から起こります。心に潜む貪欲や瞋恚や邪見の性質が表出して、身の行為となり口の行為となるわけです。ですから、実は身・口の戒めを守ろうとするならば、底を支える意業においてそれを守らなくてはならない。ここが戒律保持が困難な要因となります。

先ほど言いましたように、五戒を与えられて五戒を守るということは、そんなに困難なことではないとも思われます。優秀であれば一月は可能かもしれません。しかしそれは五戒を、身と口の行為としてしか理解していない態度になります。誰もいない山中に籠もってずっと静かにしている間は、身や口に悪行を行うことはないでしょう。ところが、厄介なのは「意」です。不貪欲・不瞋恚・不邪見の戒めが達成されるかどうかに、全体の完成がかかっているわけです。これは仏教の戒律と、世間の法律の大きな違いですね。通常の法律の場合、心に「欲しい」と思っても実際に盗まない限りは罪に問われることはありません。「素敵だなあ」と思っても、相手のカバンや財布を盗まない限り逮捕はされません。ところが仏教の戒律は、戒めの根幹に心が置かれるわけですから、貪欲の心がはたらいただけで基本的には破戒となってしまうわけです。「畜生、あの人さえ居なければいいのに」と思えば瞋恚が動き、「不幸になればいいんだ」と内につぶやいた途端に、悪口や両舌の戒が犯されることにもなるわけですね。ですから仏教の戒め

を表面上としてみれば、優秀な人物ならば一年程でも守れるのでしょうが、心の戒めということで捉え直せば、一分、一秒たりとも守ることができない自己の精神性が露わになるでしょう。このようなことが背景にあって、先ほどの龍樹の『十住毘婆沙論』もあるわけです。「菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもって疾く阿惟越致に至る者あり」です。特に「勤行精進」とは、それほどに厳しい道を、努力を惜しまずに進むことを言うのですね。龍樹はこのような難行について、次のようにも述べています。親鸞は『教行信証』に引用しませんが、同じ『十住毘婆沙論』です。

大乗を行ずる者には、仏、かくのごとく説きたまえり。発願して仏道を求むるは三千大千世界を挙ぐるよりも重し。汝、阿惟越致地は、この法甚だ難し、久しくして乃ち得べし、もし易行道の疾く阿惟越致地に至ることを得る有りやとは、これ乃ち怯弱下劣の言なり、これ大人志幹の説に非ず。（『真宗聖教全書』一・二五四頁）

難行道の実践は三千大千世界を挙げるよりも重い。貪欲の心を静めることや瞋恚の心を静めることは、実は三千大千世界を挙げるよりも重い作業である。難行の難の本質は、そこにあるんでしょう。貪欲ひとつが収まらない。瞋恚の心一つが止まらない。そのことの実現が、実は「三千大千世界を挙ぐるよりも重し」です。

難行から易行へ

ですからこのような難行に対して、龍樹は次のように説くわけですね。後半をもう一度読みましょう。「もし易行道の疾く阿惟越致地に至ることを得る有りやとは、これ乃ち怯弱下劣の言なり、これ大人志幹の説に非ず。汝もし必ず此の方便を聞かんと欲せば今まさに之を説くべし」（同右）です。「もし易行道の疾く阿惟越致地に至ることを得る

有りや」というのは、「もう自分には三千大千世界を挙げるほどの行はできないので、何かもっとやさしい行はあるでしょうか」と問う、ということでしょう。「もし簡単で、すぐに覚りの世界に至る道があるなら教えてください」と、誰かが問うているのでしょう。しかしこれに対して龍樹は「これ乃ち怯弱下劣の言なり、これ大人志幹の説に非ず」と言います。それは「卑怯で弱くて下劣な者の問いだ」と言うのです。これは龍樹の叱咤ですね。難行道に弱音を吐く人に対する、叱咤激励でしょう。「これ大人志幹の説に非ず」ですから、「志をしっかり建てて仏陀釈尊の真理に至ろうとする者の発言ではない」と、戒めることになるのでしょう。

このような形で難行道について説き示した後に、しかし龍樹は「汝もし必ず此の方便を聞かんと欲せば今まさに之を説くべし」と言われます。「卑劣なものであってもどうしても方便の道を知りたいというのであれば、今まさに教えようではないか」と言って、言葉を継ぐわけです。困難な仏道を歩むのが無理だという方もいるわけですから、そのために別の実践を方便として説こうではないかと、龍樹は言うのです。

実はこれらの言葉に続くのが、すでに先に読んだものになります。親鸞が『教行信証』に引用するものです。もう一度みましょう。

仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもって疾く阿惟越致に至る者あり。乃至　もし人疾く不退転地に致らんと欲わば、恭敬心をもって執持して名号を称すべし。

親鸞の引用には本来龍樹の文についている言わば前置きの部分、「これ乃ち怯弱下劣の言なり」という叱咤や「大人志幹の説に非ず」はありません。『教行信証』ではその箇所を引用しないわけです。そこを抜いて「仏法には無量の門があって、一つが勤行精進であり今一つが信方便の易行なのだよ」という内容を引きます。

親鸞の『教行信証』は、これからの講座の学習でもしばしば登場します。基本的には、釈尊の教説や七高僧などの

論釈からの引用によって成立する親鸞の主著です。正式名称を『顕浄土真実教行証文類』と言うように、「文類」の形で先徳の文章を集めたものになります。もちろん親鸞自身の言葉も記述されますが、全体に引用文がメインとなっています。ただその時に親鸞は、祖師方の文章を割愛したり順番を入れ替えたり、時には独自の訓点を打って引用するという作業を行います。たいへん多くの部分でそのような工夫を行っていますが、各意図については、それぞれのところで先生方から解説が加わると思います。

今のところもその一つです。龍樹が『十住毘婆沙論』で難行道と易行道について説く箇所を引用する場面ですが、特に易行道が菩提心を保つことができない怯弱下劣者のために説かれるのだと述べられる箇所は、言わばカットされます。親鸞が引用した形態をみれば、二つの道があるのだということが示されるだけです。

一度、親鸞がカットした部分と引用した部分とを続けて読んでみましょう。次のようになります。

易行道の疾く阿惟越致地に至ることを得る有りやとは、これ乃ち怯弱下劣の言なり、これ大人志幹の説に非ず。汝もし必ず此の方便を聞かんと欲せば今まさに之を説くべし。仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。

皆さん、これを読んだ時にどうお感じになりますかね。難行と易行のどちらを勧めているように読めるでしょうか。これを叱咤激励を主旨として読み取り、「志をしっかり持て」と叱る龍樹だと理解する読み方も当然あります。ひょっとするとそれが正当かもしれませんね。

しかしあるいは、これを「易行」を説いてくださった龍樹として仰ぐ受け止め方もあるわけですね。「怯弱下劣」の者に対して、それでも仏道を説き示してくださる龍樹です。難行道を厳しく説かれた龍樹を師と仰ぐのか、易行道を説き示してくださった龍樹を師と仰ぐのかです。この一つの文章をどのように受けとめるかによって、その先の仏道が大きく変わります。そこに私たち今回の連続講座で大切にする、「親鸞の眼を通して」ということがあるわけで

す。親鸞は祖師方の教えをどのような視点で受け止め、浄土真宗を伝える高僧とされたのかということです。

この龍樹の場面で言えば、親鸞にとって龍樹とは「怯弱下劣」なるものに「信方便の易行」の仏道を説き示してくださった方なのだということになるわけでしょう。難行道の道を叱咤激励しながら勧めたのが龍樹ではなく、よくよくその意図を伺ってみると、私たち衆生に阿弥陀仏の本願への信の仏道を明らかにしてくださるのが龍樹なのだという視点ですね。それが親鸞の眼を通した龍樹です。そしてまた曇鸞大師からの教示でもあります。

曇鸞は『浄土論註』冒頭に、次のように述べておられましたね。「謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに、云わく、菩薩、阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。…中略…「易行道」は、いわく、ただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願ず」です。謹んで龍樹菩薩の教えをいただいてみるならば、二つの道が説いてある。「ふと読むと、龍樹菩薩はあたかも難行道を勧めているように見えるが、よくよく案じてみると易行道を説いてくださっているのだ」と曇鸞は言うのでしょう。龍樹の『十住毘婆沙論』は、難行の菩薩道ではなく易行の念仏を説いてくださっているのだということを曇鸞は親鸞に示したことになります。

敗壊の菩薩と愚禿釈親鸞

さて、それでは今回の講義の最後の確認をしましょう。それは、曇鸞や親鸞の仏道の選択です。あるいは仏道との出遇いという言い方をしてもいいのかもしれません。これがどのような経緯の中で受け止められたのかということです。龍樹の論には、難行と易行との両方が示されているのですが、なぜ曇鸞や親鸞は「怯弱下劣」の仏道を選び取り、龍樹の教えの要として敬って進んでいくことができたのかということです。「怯弱下劣」か「大人志幹」か、その仏道の選びの分かれ目がどこで確立するのかという点です。

その視点がどのように定まったのかというと、これは実は龍樹の教えの中に選びのヒントや解答があるのではなく

て、仏道を歩もうとする曇鸞や親鸞自身の身の内に強い動機があって、易行との出遇いが湧き上がってきたのだと考えられます。もう少しかみ砕いて言えば、つまり自分自身が「大人志幹」であるのか「怯弱下劣」であるのかという、自己との出遇いの問題です。龍樹の本心がどちらを勧めているのかではなくて、自分が何者であるのかという一点に、仏道の選びの起点があるのだということです。「怯弱下劣」のわが身が信方便の易行を進むのか、「大人志幹」の者として菩提心を保持して六波羅蜜と四無量心を実践していくのかということです。これは、どちらが良いか悪いかの問題ではないんです。極端な言い方をすれば、問題は龍樹の教えの本意がどこにあるのかの吟味ではなく、自分が何者であるのかという吟味に、仏道を選び歩む起点があるのだということです。そこで、信方便の易行を説く教えと出遇ったのが曇鸞であり、さらにその曇鸞の教え、親鸞からすればもっと手前にはもちろん法然がいるわけですが、それらの先輩方の姿を通して同じく本願念仏道に立っていく自己を見出していったということになるのです。特に法然や親鸞は、仏道に立つ自己を「愚者」や「愚禿」というようにはっきりと自覚し公言する方々ですね。

実は易行道を歩む者とはいかなる者であるのかということについて、龍樹は同じ『十住毘婆沙論』の中で「敗壊の菩薩」という言い方をしております。仏道の厳しさに敗れ、壊れてしまった菩薩ですね。キチッと菩薩道を歩めない、難行道を進むことができない者です。「怯弱下劣」の者でもありますが、「敗壊」とはどういう者であるのかについて龍樹は次のように述べています。

若しは志幹あることなく　好んで下劣の法を楽い
深く名利養に著して　その心端直ならず

（『大正新修大蔵経』二六巻・三八頁）

菩提心に一貫せず、下劣な教えを好んで従い、名声や自分の利益に執着してしまった心が正されずに真っ直ぐではな

い者です。戒律一つ守ることができずに、貪欲と瞋恚の心に汚染され、仏道を進むことが出来ない者でしょう。これが敗壊の菩薩です。ですからこれらのような龍樹の教えを聞いて、自身が敗壊の菩薩であると懺悔するのか、逆にたゆまぬ努力の中から更に菩薩道の歩みに励むのかが、難行と易行の分岐点でもあるわけですね。

そこで親鸞が龍樹の論をどのようにみたのかということに戻りますと、繰り返しこれはどう読んだのかではなくて、自分をどう理解したのかということですね。自分が何者であるのかということです。

親鸞が作った和讃に、次のようなものがあります。

是非しらず邪正もわかぬ　このみなり
小慈小悲もなけれども　名利に人師をこのむなり

（『真宗聖典』・五一一頁）

とあります。「是非しらず邪正もわかぬ　このみなり」とありますが、「このみ」とは親鸞自身を指していますね。「身」は、存在そのもの、知性や理性では振り払うことのできない実態でしょう。振り払うことのできない宿業の身です。その身が、何が是で非なのかわからず、邪も正もわからない。「小慈小悲もなけれども」とは、わずかばかりの利他の心もわかないということですね。さきには菩薩の四無量心を確かめましたが、最初の二つが慈の心と悲の心でしたね。親鸞はそれが少しも無いのだと言います。利他を大切にする大乗の菩薩としては失格でしょうね。そうであるにもかかわらず「名利に人師をこのむ」です。名声と利益を求める心に満ちあふれ、さらには人から師と仰がれたいと言うのです。先に龍樹の敗壊の菩薩の詩をみましたが、親鸞のこの和讃もそれと同じ精神を吐露したものだと言えますね。

この親鸞の和讃はどこに置かれているかというと、最後に創作されたものの中に入ります。最後に編纂されたもの

は八十五から六歳の間と言われていますが、そこに詠まれるのが「この身」を痛む和讃なのですね。恐らく親鸞は最晩年まで徹底して、自分が何者であるのかということから視点を外さないのでしょう。言い方は悪いかもしれませんが、「私は敗壊の菩薩なんだ」という名のりのようにも聞こえてしまいます。徹底した親鸞の仏道への視点ですね。それが「敗壊の菩薩」という姿なのかもしれません。

ですから親鸞は正式に名のる時には「愚禿釈親鸞」と記されましたね。これが正式な名のりです。自分は「愚」である。そして「禿」というのは破戒僧、戒律を破る僧への蔑称ですね。しかしそこにまた「釈」という文字がついていますので、仏弟子であるという自覚は堂々とあるわけです。「愚かであり戒律を破って在る仏弟子親鸞という」、妙な名のりになります。しかし親鸞からするならば、信方便の易行においてはまさに正統な仏弟子としての名のりともなるのですね。

もう時間がまいりました。次回は具体的にこのような形で選ばれた「信方便の易行」について、龍樹の思想、親鸞の言葉に従いながらさらに学んでいきます。